

進化的パーソナリティ論 2

: パーソナリティの生態学的制約への接地

安念 保昌

愛知みずほ大学人間科学部心身健康科学科

Evolutional Perspective on Personality 2

: Grounding Personality to the Ecological Constraints

Yasumasa ANNEN

Division of Human Sciences, Department of Mind and Body Health Sciences, Aichi Mizuho College

This paper aims to discuss where the evolutionary origin of personality traits is, which underlies the center of psychological research.

If all the members of the population were like uniform colorless marbles, it would become impossible to refer to some characteristics of the members. Since a feature survived and favored some species, then it became common over several million years, and the feature was not recognized. Based on the motivation of comparative psychology, that is the hidden dimension, which is noticeable only through comparing species with different evolutionary background. This is an important factor for the evolutionary origins of human personality traits. To be able to refer to words, while recognizing a person's character, there must be variation with respect to its characteristics. We could recognize it as a personality trait only when its variability is not a mere error, but it is grounded to ecological constraints.

The big five dimensions are thought to come from the constraints of working memory, which itself may be coevolved with social intelligences. To separate the individual perception among the social group of around 100 people, it is necessary to categorize them into 128 groups according to the calculation of 2^5 (Big Five) * 2 (sex) * 2 (rank). When you got to classify each and every individual, we were able to maximize the inclusive fitness of the society, which has an evolutionally adaptive significance. Otherwise, there would be mere a hunk of meat in the society. Thus, the evolutionary origins of the big five major factors of personality traits are discussed.

Key Word: grounding to ecological constraints; big five; timidity; trust and peace of mind.

心理学は、人の心や行動の多様性を扱う学問である。その研究対象であるパーソナリティがはじめから、空気のような存在でもあるかのようにしているのが常である。今ここにある心や行動の多様性の特徴が、なぜそのような形になってきて認識されるようになったのか、どの様な制約がそうさせたのかを理解しようとしなければ、本質的な心の理解には至らないであろう。本論は、それを考える試みである。

1. 多様性と特徴の認識

我々が、見慣れた風景がある。見渡す田んぼの中の小道に1台の自販機がぼつんと設置されている。これを見て、さして何も感じるところはないだろう。あえて何か思いつくとすれば、この近くで田んぼ仕事をする人たちの憩いの場になっているだろうとい

うことぐらいである。ところが、こうした風景は、外国人にしてみると、信じがたいものとして受け取られる。多くの場合、人目のないところに貯金箱が置いてあるようなもので、存在自体があり得ないと感じられることが多い。自販機の普及率から言っても、日本は世界で飛び抜けて多く、24人に1台で、2位のアメリカは42人に1台と大きく引き離している(日本自動販売機工業会資料, 2010)。逆に我々が、外国を旅行しているとき、ちょっとした飲み物を買おうとしても自販機が見つからず、必ず人のいるお店に行かねばならない面倒くささを感じる。



更に極端な例は、下の写真にあるような無人販売所である。我々はそういう所に田舎道を走っているとよく出くわすが、町の中にもよくあって、別に驚きはしない。しかし、ネットの掲示板で多数話題に上がっているが、外国人からすれば、驚き以外の何ものでもない。日本以外のどこの国でも、それはただで(商品と集金箱とも)持って行ってくれと言うことを意味している様に見えるかもしれない。日本人一般の人のものを取らない、正直さに頼って、高齢化したお百姓さんが販売のコストを極力削減した結果であるとも考えられる。



(郊外の無人販売所)



(大都市の住宅街にある無人販売所)

(自販機と一緒にあった無人販売所)

これらの話から言えることは、日本の治安の良さ、正直な性格が、ビジネスのコストを極端に低くでき、そうした社会に暮らせている安心感に浸れる心地よさに日本人は慣れているのかもしれない。

ここで重要なことは、世界中の人が普通に日本人の性格を持っていたら、この話題は、こうして語られることがないどころか、認識すらできないはずである。不正をする人が全くいないので、それに対してのコストを掛ける方がおかしいことになる。当たり前前のことになって、背景化して、認識されなくなる。

例えば、我々は、普通、呼吸をして、酸素を取り入れ、二本足で歩き、距離を両目で計り、時にジャンプするが、それが、誰かの特性として焦点が当てられることは全くない。「あの人、二本の足で歩いているよ」とは、言えない。しかし、もしそういう言葉が語られる場合、あるいはそういった特徴が目され問題になる場合、それは、病気やけがをしてその能力を失ったときや、ヒトを近縁種と比べるとき

である。

この様に、ある集団の特徴が認識されるためには、比較される他の集団との違いが存在して、認識される必要があるということである。そして、この違いがどこから生じてくるのかを考えてみる必要がある。

ある生物の種において、ある特徴も持っていることで生き残りやすく、それが長い年月を掛けて一般的になり、その種全てがその特徴を持ったとき、その特徴は認識されなくなる。それが、隠れた次元であり、違う進化的背景を持った種と比較することで始めて、その次元に気付くことができる。これこそが、比較心理学の本質的な動機でもある。

こう考えてくると、心理学が、言葉によって、人の特徴を議論するとき、その言葉を当てはめようとする動機があると言うことは、その特徴の程度の違い、あるいは有る無しがあってはじめて、その特徴に気付くことができると考えることができる。すなわち、その言葉に関わる次元において両極端な選択圧が存在していたことを意味する。誤差の範囲で、分散が広がっているだけでは、言葉を当てはめようとはしないはずである。

例えば、日本語には「猫舌」という言葉が存在するが、この言葉を英語に直そうとしても、“cat tongue”と言うことはできなくて、“cannot eat or drink very hot things”等と言うしかない。これは、多少の誤差はあっても西洋人は舌の感受性が一樣に熱いものに弱く、それ故に、熱いものを飲まないのので、このことを一言で言う言葉が存在しないと考えられる。さらに言えば、温度を下げるため音を立てて啜ることを下品と捉える感覚も出てくることになる。それは液体を熱くしなくても雑菌が繁殖しなかったからかもしれない。しかし、日本人には、猫舌の人もいれば、そうでない人もいて多様であるので、とりわけ熱いものが飲めない人をそう呼んだと考えられる。熱いものを飲めない人は、のどをやけどしたり、食道ガンになったりする危険性は下がるが、一方、熱いものを飲める人は、雑菌の繁殖の少ない飲み物を飲むことができるのである。ただそのためには、ずるずると音を立てて温度を下げる必要があるが。

さらに、最初の例で言えば、「日本人は正直者だ」と、その特徴を言葉で記述すると、不正直な生き方、あるいはそういう集団や民族が存在しているからこそ、その言葉と意味が生まれてくることになる。

そのどちらも生き残ってきた歴史があるはずである。例えば、最初、正直者と不正直ものが同数半々いたとして、相互作用をしていたとすると、正直者が馬鹿を見るばかりで、悪貨が良貨を駆逐する如く

に、正直者は減るとともに、場所を変えて不正直者と接触するのを避けていったと考えてみよう。ところが、正直者だけの集団では、無人販売所で生計が成り立つくらい物流のコストが安いから、どんどん繁栄して行って、たまに入ってくる不正直者もだんだんと正直者になっていったりしていた、と考えるとしてもよい。

そのような歴史と、そうした(ゲーム理論的な)相互作用が起きうる生態学的な制約を発見し、記述してゆくことで、この「正直さ」という特徴に関わる言葉が比較心理学的意味を持ち始める。ある生態系にニッチを持つ種が、その制約から、どの程度の「正直さ」を持つかを推定でき、環境の変動とともに、どう変化していくのかを予測できれば完璧なものとなるであろう。

生態心理学と近い位置にある認知言語学が言葉の概念的意味だけで成り立っていた言語学ではなく、具体的な事例から成り立つ言語学を目指すことに対して、接地 grounding (Langacker, 1991) という言葉を当てている。具体的な意味は、身体・環境・生態系に接地させられた状況で生まれるが、生き物の特徴を記述する言葉は、動物の身体が、生態系において淘汰されてきた中でのみ生まれてきていて、その進化的背景に接地させることができる。

2. 言葉の生態学的に接地した構造：信頼と安心

山岸(1998)によれば、日本人社会は、相互信頼によって成立している傾向が強いと思われるのに、アメリカ社会よりも、他者一般を信頼する傾向はむしろ低く、同質な者による不確実性を下げることによる安心によって成立しているのであると言う。そこにおいて、安心とは「相手が自分を搾取する意図をもっていないという期待の中で、相手の自己利益の評価に根差した部分」であり、信頼とは「相手が自分を搾取する意図をもっていないという期待の中で、相手の人格や相手が自分に対してもつ感情についての評価にもとづく部分」である。安心の方が、感情という曖昧なものではなく利益に根ざしている分、確実さが増す。しかし、「安心が提供されやすいのは信頼が必要とされていない安定した関係においてであり、信頼が必要とされる社会的な不確実性の高い状況では安心が提供されにくい」ということになる。しかし、社会全体の不確実さが増してくると、特定のコミットメント関係を構築して、不確実さを減らし、安心を得ることができるが、「そのために手に入れられる情報の量が制限される」というかたちで機会コストを支払っていることになる。この機会コストが高い社会においては、むしろ安心を捨て、信頼

に基づく社会の方がそのコストを減らせて、幅広い情報と高い利益を得られるので、他者が信頼できるかどうかを見極めて、他者信頼する社会への転換を主張している(「信頼の解き放ち理論」)。

これまでに述べたように、これも日本人だけでの研究では絶対に生まれてこない議論である。日本人にとっての信頼とは、安心できることが第一であるという揺るぎなさを前提としているが、信頼の本来の意味は、不確実な、予測のできないものを大丈夫だと信じるかどうかであるが、その言葉の意味が、その民族の適応してきた歴史によって、信頼とは安心できることと変容してきていることを示している。日本の文化は、「型」の文化であり、様々な生活場面で、「型・作法」が、「道」にまで昇華している。その「型」にはまっている限り、皆が安心して暮らしてきたのである。戦国時代の戦いにも「型」があり、それが武士道を構成している。また、近年の日本社会は、産業が産み出す製品の故障率の低さによって、世界的なシェアを獲得してきた歴史を持っているが、社会全体が、時間通りに正確で確実であることによって、緻密で高い生産性を上げることができたのである。しかし、一方で、外部からの情報を遮断した特定のコミットメント関係による集団が作られ、安心していられるであろうという安全神話が作られ易くもなった。例えば、原子炉は絶対に壊れない、新幹線は絶対事故を起こさないなどの安全神話がある。しかし、そうした安全神話に頼る安心社会は、どこかが崩れたとき、連鎖的に崩壊してゆく脆弱性を持っているとも言える。

安心と信頼という二つの対立軸が、進化的に存在し得て、ある意味で、両方が、適応的に存続しているとも言える。絶対に安心できるところまで精度を上げてゆくには大変なコストがかかるが、その中では不確実な信頼を捨てることができる。しかしそこまで、コストが掛けられなければ、利益とのかねあいで、信頼できるかどうかを見極めながら信頼を進めてゆくのもありうるのである。

この話の流れで言えば、上記の無人販売所は、他人の正直さを信頼して売っているのではなく、狭い村社会の中での視線を意識しながら正直ぶらざるを得ない関係性による安心の中で成り立っていることになる。

もし、日本が、他人の正直さを信頼している社会であれば、ドイツ以上に乗車運賃の回収におおらかでよいはずである(ドイツでは、駅の入り口にも出口にも切符の検札はなく、乗車時に、あちこちにある打刻機で時間を刻印するだけであるが、不正が見つかる、1ヶ月分の運賃を罰金としてとられる)。し

かし現実には、不特定多数の利用する駅では、正直と思われる人を信頼せず、厳格な、世界で最高とも言えるくらいの高コストな運賃支払いシステム（世界初の非接触型 IC カードのための通信技術を使ったシステム）が完成している。狭い村社会では、1 個 100 円ぐらいの不正をはたらいでの得よりも、正直者ではないという風評が広がって、“信頼”をなくす痛手の方が遙かに大きいのである。日本人においては、はなから信頼はしてないが、安心できないことの方が問題だと言うことになる。

同じことが、先の震災時に日本人の取った行動にも表れてくる。極限の被災した状況でも、暴動や略奪を起こさず、集団の規律を守り、困難に立ち向かって行く姿は、世界中から賞賛されている。日本人にしてみれば、何も変わったことをしているわけではないことが、外国の人からすると、賞賛に値するくらいのことになってしまう。山岸の信頼の構造からすれば、衆人監視の元、どこの誰だか直ぐ分かるような社会では、一人だけ暴れ回って略奪して生き残っても、末代まで語り継がれてしまうであろうから、やろうにも絶対やれない（こっそりとなら、略奪は起きたが、日本人がやったかどうかは不明）。しかし、巨大な地震災害だけ見ても、十数年に一度は日本のどこかで起き続けている。その他、台風や風水害、豪雪等の自然災害が何かしら毎年どこかで起こるという過酷な国土に適応してきた民族にとって、極限状況でも規律を守ることが生き残るすべであったと見るべきなのかもしれない。

東京医科校で教鞭を執ったエルウィン・ベルツの日記(ベルツ, 1979)にも、先の震災と何ら変わらないことが記されている。「日本人とは驚嘆すべき国民である！ 今日午後、火災があってから 36 時間たつたためぬかに、はや現場では、せいぜい板小屋と称すべき程度のもではあるが、千戸以上の家屋が、まるで地から生えたように立ち並んでいる。・・・女や男や子供たちが三々五々小さい火を囲んですわり、タバコをふかしたりしゃべったりしている。かれらの顔には悲しみの跡形もない。まるで何事もなかったかのように、冗談をいったり笑ったりしている幾多の人々をみた。かき口説く女、寝床をほしがる子供、はっきりと災難にうちひしがれている男などは、どこにも見当らない。」

戦国時代を除いて、日本人が死に直面したのは、何らかの自然災害であった。大石久和(2011)によれば、日本は「厳しい自然条件」であり、他国に比べ、地理的な大きな「ハンディキャップ」を背負っていると述べている。それは、南北に細長い国土に、脊梁山脈があり、大都市はすべて河口部の軟弱な地盤

の上にあるが、そこに、4 つものプレートがひしめき合って、国土面積は世界の地表面積の 0.25% しかないにもかかわらず、全世界のマグニチュード 6 以上の地震は 2 割が日本で発生している。その上、地球総平均の 2 倍以上の年間降雨量が、梅雨末期と台風期に集中し、台風の通り道に沿うように日本列島が展開して直接影響を受ける。また、国土面積の 60% が積雪寒冷地域にある。

他人をいくら感情的に信頼できても、自然災害は確実に死をもたらしてしまうのであれば、人への信頼よりは、実質的な確実さを求め、集団で自然に立ち向かうしかなく、不幸にも死に見舞われたときは、無常観を持って流してゆくほかなかったのであろう。大石久和(2011)は、「日本人の独特の精神性は、日本の『脆弱国土』と『繰り返す起こる災害』によってはぐくまれたもの」と述べている。自然災害の少ない他の国にしてみれば、死は、相対的に人同士の軋轢で生じてくるが多かったのかもしれない。そうであれば、どの人を信頼するかが重要な意味を持つてくることになる。ちょっとした揺れでは壊れない建物を建ててくれる大工に安心し、どんなことがあっても水門を開めてくれる人がいることに安心して暮らしてきたと言えるだろう。日本各地にある五重の塔が、地震で崩れたという話は存在しないのである(上田, 1996)。

こうしてみると、社会において如何に不確実性が増したとしても、4 万年にわたってこの自然災害の多い列島に(遺伝的に)適応してきた日本人に、確実さを求める特定のコミットメントを捨てて、信頼社会を構築せよ(山岸, 1998)と言うのは不可能に近いことなのかもしれない。それぞれの民族の特性は、その言葉とともに、適応してきた自然環境に接地していると言える。

3. リスクの取り方と臆病さ

山岸の言う、安心を取るか信頼を取るかは、リスクの取り方と関わっている。安心は、リスクを全くなくす方向だが、信頼は、裏切られるかもしれないというリスクを背負いながら、よく見極めようとして可能性を広げてゆくが故の信頼である(山岸・プリンソン, 2010)。そういう文脈から考えると、「臆病さ」と言う言葉が関わってくることになる。

生物が、生きてゆくためには、他の生物を食べてゆかねばならない。それによって、この生態系には食物連鎖が起きてくる。つまり、食べられないようにしながら、食べてゆかねばならない。生物は、食べられるかもしれないというリスクを基本的に背負っている。リスクを取りに行かず、絶対的安全圏で

のみ食べてゆこうとするのは、臆病という言葉に繋がる。その反対に、リスクがあるにもかかわらず、利益を取りに行こうとするのは、その逆の堂々とした特徴といえるだろう。

我々は、その臆病さに関して両極に淘汰圧を掛けて、ラットの人為的選択交配を行ってきた。淘汰圧は、安全な暗くて狭い場所から出でて、比較的明るい直線走路(夜行性のラットにとっては恐怖な状況)にどれくらいよく動き回るかを指標として、多い者同士、少ない者同士を掛け合わせて、両極の動物を作り出していった。2世代ほどの選択交配で、直ぐに反応が現れ、数世代で重なりは全くなり、20世代を超えると、ほぼどの遺伝子座もホモになる非常に臆病なラットと非常に堂々としたラットの近交系動物が完成した。臆病なラットを THE 系、堂々としたラットを TLE 系と名付けた(Fujita, Annen, & Kitaoka, 1996)。

ここで、臆病だ、堂々としているという言葉は、こうした状況を人の言葉で近いものを当てはめているだけであるが、THE 系が適応して生息していたと仮定される環境では、リスクを冒して直線走路に出してしまうと、食べられるか何かで、子孫を残せなかった環境であり、一方、TLE 系は、食べられるかもしれないというリスクにおびえて外へ出て行かなかったものは、餓死するなり、配偶者から忌み嫌われるなりして、生き残れず、リスクを冒して出ていったものだけが生き残った環境であると見ることができる。

生きている限りリスクは存在し、そのリスクを回避するのか、立ち向かうのかで、生物の生き様を記述できる次元が存在している。どちらの方向にも適応してきた歴史が、人にも、ネズミにも存在していたので、我々ヒトが同じような言葉で理解できたと見ることができる。もし、ヒトという種がリスクを取らないでしか生き残れなかったとしたら、我々には、この次元を認識して他の動物の姿を理解することができなかつたと言えるであろう。

4. 人称概念における生態学的接地：信頼と心の理論

ヒトが、この様なある特徴の次元を認識し、言葉となるには、どちらかに振り切られてしまわないで、連続的なレベルでばらつきを持っている必要があり、そのためには、その両極の生き方に適応的なニッチがどこかで存在していたと考えるべきであろう。そして、我々が他の動物の姿に何らかの言葉による記述を行うことができるということは、その言葉に関わる同じ淘汰圧を共有していたことを意味する。さ

らに言えば、特徴を示す言葉に限らず、言葉はまだ思い浮かばなくとも、認識できたこと全てが、生物の歴史の中で淘汰されてきたことに関わっているとさえ言うことができる。

例えば、“私”という言葉というか、概念がいつ誕生したかは、ミラーテストによって研究がなされている(板倉, 1999)。動物に気付かれぬように頭部にシールあるいはペンキを塗っておいて、鏡を見せたとき、いきなりそのシールやペンキの塗ってあるところを触れば、このテストは合格となる。数百時間の鏡テストの後も、鏡に映った自己像に威嚇攻撃をするニホンザルに対して、チンパンジーは直ぐに自分だと気付いてしまう。類人猿への進化のどこかで、言葉にはまだなっていないが自己概念が誕生した方が生き残りやすかつた歴史があつたのであろう。

これに対して、“あなた”という二人称の概念は、動物の研究では難しい。配偶者の概念は、11億年前に性が誕生して以来の古い言葉であり、親子の概念は、それより古く、生命誕生以来の無性生殖の時代からの言葉である。

しかし、人の言うところの二人称には、親密な関係性か、無機的な目の前の自分以外の他者の一人を指す場合で、“あなた”は文化によって、多様な広がりを持つ言葉になる。この点、英語圏は“you”と特別に詩的な言葉として“thou”があるくらいで、親密か否かを区別していない点で奇妙なくらいである。一方、フランス語では、親密な“tu”と、初対面で距離を置いた相手への“vous”の使い分けがある。

日本語では、基本的に主語を省くため、なるべく言わないようにしているが、あえて言わないといけないうきに、苦しみながら、状況次第で多様な言葉となってしまうようだ。お店での接客の状況を考えるなら、距離を置いた場合“あなた”とは決して言えなくて、“お客様”あるいは、言わないで失礼ですが”を付けて、言わないようにするしかない。師弟関係であれば、“先生”、“～さん”で、親密であるかどうかに関係がない。また、夫婦関係では、“あなた”、“君”と言えるのは、ごく一時期でしかなく、“お父さん”、“お母さん”が、“おじいさん”、“おばあさん”へと変わり、日常的には“おい”、“ねえ”と呼びかけるだけである。どんな関係性においても、あえて二人称の主語が発せられるときは特別の場合で、自己と相手を客体化して考えないといけないうことを宣言しているような言葉になってしまう。

動物が、他個体と何らかの形で交わる社会行動を行うとき、例えば、グルーミングを行うときや、攻撃をするために噛みつくときに、抽象化された二人称が必要になるにはどんな状況かを考えなければなら

らないだろう。ほとんどの動物は、特定の二者関係の中で相手は認知するとしても、グルーミングをしている相手、噛みついてる相手として見なししているとしたら、個別の関係性で相手を見ている、日本人と同じようなものかもしれない。

数少ない言葉で二人称が成り立つためには、個別の関係ではなく普遍的な相手として「信頼」できなければならないであろう。日本人は、個別の関係性で確実に「安心」して何をしてくれるのかを見ようとする民族であるかもしれない。そのため、それぞれに個別の言い方を変えてゆくしかないであろう。”あなた”や”貴様”は、一度は言えても、繰り返すことは絶対にできず、何度も相手を言うときには、それぞれの関係の中の言葉に変わってってしまう。おそらく、それは、確実にやってくれる安心を求めて言うことなのであろう。

ミラーテストでは、ラットは何度も鏡に突進して失敗している(安念 b, 1986)が、筑波情動系ラットの世界で二人称を考えると、どうなるであろうか。臆病な THE 系ラットは、新奇なものを極端に避けるよう選択交配されてきて、関心があるのは、親しんだ空間と親密な社会的関係だけになっている。優位雄は同じ集団の劣位雄を信頼して任せているのではなく、順位に関わる見回りを常にしていて、そのため、順位が非常に厳格になり、優位に立つ雄は、劣位雄の微細な反抗姿勢に直ぐ攻撃を加えるため、劣位雄の体は、かまれた傷でかさぶただけになる。優劣の関係の中で、相手は、その順位にある振る舞いを確実にこなしていることを監視し、それが確認されれば安心していられる。縄張りに侵入者がいて、劣位雄が出しゃばろうものなら、優位雄は侵入者を排除するより、優劣の順位を優先して、劣位雄の方を攻撃するのである(安念 a, 1986; 安念 a, 1988; 安念, 1989)。

これに対して、TLE 系は、縄張りへの侵入者に対して雄たちは対等に激しく攻撃はするが、その雄同士争いは、全く見られず、どの個体の体にも、噛まれたときにできるかさぶたはほとんど見あたらない。新奇なものや空間に対して、極度の関心を持つが、親密なものに対する関心は一切なく、その結果、フラットな社会構造ができあがってしまった。その二つの系統の社会を、屋外の広いフィールドで飼育した研究(安念 b, 1986; 安念 a, 1988; 安念, 1989; 安念 b, 1988; 藤田・安念・北岡・中津山・加藤, 1991)では、臆病で、厳格な社会を持った THE 系は集団サイズが維持されていったのに対して、フラットな社会構造を持った TLE 系は、子が育たなくなり、クラッシュしてしまった。出産直後の雌は、強力な性フ

ェロモンで雄を誘うのであるが、順位構造のない若い雄たちが、よってたかって、性行動をしたことにより、子育てがうまく行かなかったのが原因と考えられている。侵入者への攻撃でも、発情雌への性行動でも、雄たちの中には攻撃行動は一切起こらない。空気のような存在のように、親密なものに一切関心を示さないのである。彼らにしてみたら、自分の欲求を満たすことだけに関心がある、いわば自閉的な特徴を持っていて、自分以外の単独あるいは複数の他者として二人称的存在あるいは、目の前にいてもいなくても同じ三人称的存在なのかもしれない。英語の二人称が you であるが、単複同型である点がある意味で似ているのかもしれない。

ただ、無理やりヒトの安心・信頼の議論に持ち込むなら、TLE 系に他者を信じて任す意味は全くなく、この軸は、心の理論の軸に乗っていると考えるべきかもしれない(安念, 2001)。すなわち、他者の心・意図に関心を持ち過ぎる極では (THE 系)、特定された相手との関係で特定されたことをやってくれることを監視して安心できる社会ができあがる。一方、TLE 系は、親密な他者のことには一切関心を持たず、新しいことに飛びついて行くので、他者存在に関心しないかに見える社会である。その中間に、情報をたくさん集め、他者をよく見極めて、相手を信頼する社会が出現してくるのかもしれない。

5. 主要五因子の生態学的接地構造

1) 外向性

ヒトの世界では、言葉は多様に広がってゆき、広がった言葉の似通ったものを集め(因子構造として)集約すると、上記の臆病さの次元は、内向性・外向性(アイゼンク, 1965)と関連しているかもしれない。筑波情動系ラットとアイゼンクの内向性・外向性の議論は、安念(2006)に譲るとして、アイゼンクは、類型レベルを頂点として、特性レベル、習慣的反応のレベル、個別的反応のレベルの4層からなるパーソナリティの階層構造を提唱した点(上里・山本, 1989)を、今回の話の流れで考えてみることにする。

その類型とは、我々がその特徴の次元を認知する軸を構成する両極にある、進化のどこかで適応できた生態系における居場所(ニッチ)であろう。環境の変動による、捕食者と餌となる被捕食者の変動から、その典型的なニッチはだんだんと崩れていく。それで、新たな最適なニッチができ、集団サイズが大きくなって新たな極ができあがると、別の軸が誕生してくる。筑波情動系ラットの研究事例を拡張して考えると、TLE 系は、新たな空間への転身を常に図る

うとして、安定した社会を作ろうとしない系統であるが、32 畳という実験室ラットにしては巨大な空間をしても狭すぎたのであるが、順位のない雄たちによって、集団がクラッシュしてしまった(安念 b, 1986; 安念 a, 1988; 安念, 1989; 安念 b, 1988; 藤田・安念・北岡・中津山・加藤, 1991)。しかし、新たな空間を見出してゆけば生き延びられたはずであるが、放散した先で大規模な集団を作っては再び不適応を起こしてしまうので、できるだけ小さな集団を作るようにテリトリを大きくとってゆくかもしれない。あるいは、THE 系的な落ち着いて厳格な社会構造を作らざるを得なくなるかもしれない。一方で、THE 系は、一向に新たな空間に出て行かないでいたら、環境の激変にあって、種として絶滅しているかもしれない。僅かに、新たな土地に放散した個体が生き残り、TLE 系的特性が入り込んでくるかもしれない。この様にして、類型は特性として変わってゆくと考えられる。

2) 開放性

新たな類型は別の要因が絡んでくるかもしれない。この内向性・外向性という言葉が成り立つためには、リスクを認知し、利益との比較を行うための非常に高度な認知能力がどうしても必要になってくる。捕食されるというリスクを如何に下げながら餌探しを効率的に行うか、そうした情報の処理のために、神経系が進化してきた。捕食者が何処でどの様なときに現れるか、あるいは、餌がどの様なときにどこにいそうかという過去の情報を記憶し、現在の状況と照らし合わせることで、神経系の重要な働きとなった。神経系は困難な状況を如何に避けるかに関わるが、もう一つの流れは、捕食者との戦いである種の武器を持つこと、身体的能力に関わる進化である。脳神経系の情報処理と、この身体的能力は、不可分に進化してきたのであろう。この環境の意味に先ず接地してくる身体性が様々な情報をアフォードして、直接的な知覚を与えていると見るべきであろう。この領域は生態心理学が対象とする分野である。

この様にして、脳神経系が進化してゆくと、生態系に多様性があり、さほど天敵もいない場合に、情報を果敢に追い求めてうまく適応するニッチが存在してくるかもしれない。こうして、開放性の次元が誕生してきたのかもしれない。豊かな森林の多様なものを庭と言う表現空間に配置するニワシドリは、奇抜な庭が雌の気をひくことで配偶者を獲得できるようになる(Morell, 2010)。しかし、ニワシドリを捕食する猛禽類がいれば、逆に簡単に巣の場所が分かってしまう。天敵が少ないが故に性的選択を優先で

きたと言える。

この次元においても、豊かな環境で、天敵が少ないところばかりがあるわけではなく、その逆の環境も存在するので、新たな情報の開拓にはリスクが伴い、全くリスクをかけないで、先祖からのやり方で行くという戦略も、適応的であった。そのため、この次元が極端にどちらかに落ち着くことはなく、それによって、この次元が認識されるようになったのであろう。

3) 誠実性

子育ての繁殖戦略に関して、生態系には2つの類型が存在する。r 戦略と呼ばれる、卵を小さくして、できるだけ沢山産むやり方で、親の育児への投資は少なく、捨て育てに近い小卵多産戦略である。鮭がたくさん産卵して、多くは、その河にいる魚の餌となり、母川回帰して、わずか2個だけ次世代を産むことで、集団は安定して生き残っていくのである。もうひとつは、K 戦略と呼ばれ、卵を大きくし、数を減らして、大切に育てる大卵少産戦略である。この典型が、ヒトであり、近年先進国は、少子化に悩んでいる。

r 戦略では、生理的に生めばよいだけであったが、繁殖が K 戦略に変わって行くと、子育てを真面目にやるかどうか、その種の生き残りに重要な意味を持ち始めることになる。こうして、誠実性の次元が誕生してきたと考えることができる。雌の繁殖戦略は、雄よりも次世代に多くを投資する。それは、卵子が精子の数千倍から、数百万倍の大きさであることから、性における繁殖戦略に関して、雌は K 戦略をとっているのに対し、雄は r 戦略をとっていることになる。その結果、雌は、雄を選ぶに当たり、次世代への投資の不均衡を解消しようという動機付けを持つ。雄は、なるべくその不均衡をそのままにして、なるべく多くの雌に種付けをしたいという動機付けをもつことになるが、雌は、そうさせないように、そういう雄を選ばないようにすればよく、自分の種付けした子をしっかりと育ててくれる可能性を持った雄を選ぼうとする。

ここに、山岸(1998)の言う、信頼と安心の枠組みが当てはまる。確実に子育てをしてくれる男性を捜しても、将来どうなるかわからないリスクを抱えることになる。そこで安心を得るために、仲人を立て、見合いをし、親戚を巻き込んで、家同士の結婚という形をとって、男性には将来にわたる子育ての確約を得ようとしてきたのが日本の婚姻形態であろう。

戦前では七割を占めていた見合い結婚は、現在その姿は大きく変わってきて、2005年の調査では

6.2%まで減少してきている(国立社会保障・人口問題研究所、第13回出生動向基本調査)。さらに晩婚化が進み、女性が、27.4歳、男性が29.3歳となっており、ここ10年で2歳以上初婚年齢が上がる現象が起きているが、安心して結婚できる相手を見つける仕組みをなくしたため、安心できる相手を探している間に遅くなってしまっていると見る事ができるであろう。

その対極にあるアメリカで、これまでは、晩婚化は起きていないと言われていた。幅広く情報を求め(付き合いをして)、リスクをしっかりと見極め、信頼して結婚に踏み切る。だが、うまくいかなければ離婚すればいいと言うので、離婚率は3.6件/1000人と世界で4位を占めている(それに対して、日本は2.04件/1000人で、26位)が、子供はいずれにせよ生まれるわけで、日本では選りあぐねて遅くなった分だけ少子化は進むことになる(しかし、アメリカでも、不況のあおりを受けてか、晩婚化がすすみ、25-29歳の未婚率が2009年では47%で、1986年の同26%に比べ、かなり高まってきている)。

いずれにせよ、女性あるいは、動物の雌が、その繁殖戦略の中で、男性あるいは雄たちの誠実さを求める動機は、K戦略が進むにつれて高まってゆくことになるが、雄たちの全く不誠実な生き方にも適応的な価値は存在したと見るべきである。なぜなら、全ての雄が誠実であるものだけが生き残り、不誠実な特徴が消えたら、上での議論と同じで、我々はその特徴を認識できなかったからである。雄たちの不誠実な生き方は、ある意味、r戦略的で、不安定な環境では、生き延びる可能性は高まったと考えることができる。しかし、安定した環境では、雌は雄に誠実さを求めて、性的淘汰圧を掛けていったと考えることができるであろう。

4) 調和性

生物が、K戦略を進めると、子育てをさらに確実に行う必要が出てきて、配偶者同士だけに任せず、集団で庇護してやることになる。恐竜時代を生き延びた小型哺乳類が森の中で進化を始めたのが、霊長類であるが、森の中で集団社会を作るようになっていった。

社会ができあがると、生態系の中に、社会という二次的な生態系ができあがり、集団社会に如何にうまく適応してゆくかどうかが重要な意味を持つ。社会から放り出されると、そう長くは生きてゆけないし、社会的生態系では、順位の高いものほど、多くの子孫を残し得て、順位を上げるための競争が起きてくると考えられる。社会生態系の中で生き残りう

まく立ち回するには、社会的知能がその中でも重要な役割を持ち、いろいろな仲間と連合を組みながらマキアベリ的知能を駆使して、順位を上げてゆくことを競い合うようになってきた(バーンとホワイトマン, 2004)。

そのやり取りをうまくこなすためには、他者を個体識別し、いつ誰からどの様な恩恵を受けたかを記憶し、お返しをすることが求められるようになる。この互惠的利他行動をしない個体は、社会から放り出されるし、放り出さない社会は、そうしたズルをする個体(チータ)によって、社会自体が淘汰されていったと考えることができる。

相手の考えていることを知ろうとして、心の理論(Premack & Woodruff, 1978)が社会の進化とともに、どこかで働き始めたと考えられている。それは、だませる相手からなるべくだまし取りたいという動機からかもしれない。社会の構成員が全員、ズルをしない正直者で、受けた恩恵を確実に正しく返してゆく個体ばかりで成り立っているのであれば、心の理論を働かせて、他個体の心を探る必要もなかったはずである。しかし、そのような完全な社会は、よそから入ってくるチータに簡単につぶされてしまう。だから、心の理論を推し進めたのは、ズルをするチータだったと言っても過言ではない。あからさまのズルでは直ぐに分かってしまうが、微妙なケチの程度を見抜くよう、きちんとお返しをしない個体はそれなりに警告を寄せられるように、だんだんと微細に進化していったのであろう。

こうした社会的生態系で誕生してくる特徴次元が、以上の全ての活動を含んだ調和性である。全ての個体が調和的で、そうした特徴を持った個体だけが生き延びていたなら、また同じように、我々には、この特徴を認識できなかったはずである。上で見てきたように、調和性に欠け、ズルをする個体が入り込むことで、社会はより頑健になっていったのである。非調和なものだけのニッチは存在しないかもしれないが、この調和性における多様性が、社会的生態系の進化をもたらしたのであろう。

5) 情緒不安定性

この社会的生態系において、調和性を巡って、別の次元が浮かび上がってくる。社会的生態系の中で、完全な調和的社会において、何らストレスもなく生きていられるなら、情緒が安定していられるであろうが、社会が成熟して頑健であればあるほど、調和的な個体ばかりではなく、様々なズルのレベルのチータが存在してくる。そんな社会では、ゲーム理論的な相互作用から、必ずストレスが生まれ、それを

被った個体は情緒不安定になってゆくであろう。

完全な調和的世界にチータが入り込んだとき、調和的社会を目指して、それに対して愛他的に振る舞うことは最大のストレスであり、それが情緒不安定の典型的な原因であろう。それを避けるには、同じようにチータになって行くしかないが、そうすると全体的に非調和的な社会になってしまい、社会集団間の競争では、その集団ごと淘汰されるかもしれない。そこで、誰かが情緒不安定になることで、社会は、一定の調和的状态を維持できると考えることができるかもしれない。このようにして、情緒不安定性の適応的意味を見いだせるのかもしれない。

ここでも同じ議論が成り立つが、社会的生態系の中で、情緒が安定している個体だけが生き残り、情緒不安定な個体が完全に淘汰されてしまっていたら、この次元は、認識されなかったはずである。しかし、認識できていると言うことは、情緒不安定な存在に、何らかの適応的意義が存在していたと見るべきであり、その一つのストーリーとして考えられるかもしれない。

6) 主要五因子の制約構造

どの次元の特性も、一方的にどちらかに偏らないような仕組みがありそうである。比較心理学は、性格特性のその偏らせない原理を、進化的な流れの中で見出してゆく学問である。それを、得られたデータの構造だけから概念構築していこうとすると、とたんに空虚に空回りすることになる。概念的な議論だけでは、何処にも、接地していないからで、接地するのは、心を生み出してきた進化生態学的文脈でなければならないのである。

性格特性の次元が、何処の地域や民族においてもその5因子:外向性、調和性、誠実性、神経症傾向(情緒不安定性)、開放性が見いだされている(Goldberg, 1992; マックレーとコスタ, 1992; 辻・加納・新野邊, 1990; 辻, 1998; 和田, 1996; 下仲・中里・権藤・高山, 1998; 村上・村上, 1997; 1999)。この普遍性のある、5因子の進化的な意味合いを考えてきたが、心理学は、言葉というシンボルを使って議論する学問である。言葉として認識できるのは、これまでに見てきたように、その言葉に関わる次元において、多様な姿が存在しているからで、人の特徴に関して5因子に集約されると言うことは、これ間に見てきたような進化的次元が、ヒトの成り立ちにおいて、とりわけ重要であったと言うことを意味している。

しかし、もう一つの側面があり、それは、ヒトが、社会的生態系に生きていることに関わっている。

社会的な地図を持ちながら、対面したヒトを、即座に分類して最適な対処を考えなければならない。ヒトが一時に処理できる能力は 7 ± 2 である(Miller, 1956)が、そのうちの5つを使い5次元の高低の評価をして32通りのヒトの多様性を分類できることになる。ヒトが小集団を森の中で維持してきたのは、50人ぐらいの集団であったと言われているが、それに近い数字となる。集団内のヒトの個性が認識されなければ、集団内のヒトは、単なる肉のかたまりになるだけであるが、個性を全て個別に認識することができれば、集団の持つ能力を最大に引き出す可能性が出てくる。人の持つ多様性から性格特性を抽出できる特性は他にもたくさんあったであろうが、集団の包括適応度を最大にできる最も重要な特徴がそれら5つの特性であったに違いない。

一方で、このワーキングメモリ自体も社会の進化とともに拡大していったと考えられる。7つという数字を規定しているのは、この対人認知に関わる、集団のサイズであるのかもしれない。残りの処理能力2つは、若者にしてみれば、相手が男か女か、そして順位が上か下かを意識しないといけないだろう。それで、7つのワーキングメモリが埋まり、全てを分類すると、人が快適に暮らしてゆける最小な集団サイズとして、128通りの分類となる。

6. 方法論

そうした5次元に限らず、ヒトの性格は、言葉にならないものですら、言葉として掘り起こしてゆくプロセスを経て、膨大な切り口が存在している。心理学の研究では独立変数として、様々な行動・生理的指標や質問紙が使われ、従属変数としても、同じような指標が使われ、差を見出して、この指標を代表とする要因がこの様な影響を持っていると言うような議論がなされる。独立変数と従属変数が選ばれるには、それなりの研究の流れがあって、当然の選択であるが、多くの場合、進化的な視点を欠いており、単なる複雑なネットワークのある領域同士の相関を見ているだけで、研究が量産されている様に見える。

しかし、ここでの議論で見てきたように、ある性格特性が存在すると言うことは、そのように生きてゆける適応的戦略が存在したことを意味している。心の構造を探ると言うことは、ヒトに至までに動物が適応し生き残ってきた歴史をひもとくことに等しい。そこで受けてきた淘汰は、いろいろな制約を心に課してゆくことになるが、制約も条件によって場合分けられ、あるいは階層性を持っているはずである。心の構造は、そうした制約の構造を明らかにす

ることである。そこには、何らかの淘汰圧が加わってきた歴史を繁栄して現在こうなっているという見方だけが真実であり、その見方を通して、他の学問と連携がとれるのである。

しかしながら、進化的な選択圧による心への制約の構造を、現時点で明らかにするには、方法論的にはかなり限られてしまう。実際に選択圧を掛けてみて、それを生態系に戻してどのような適応をするのかを見るのが、一番確実なやり方であるが、それはヒトの代理であるモデル動物で行われるだけで、その結果をヒトに当てはめるにはかなりの問題を取り扱わねばならない。

そのなかで、一つ可能性があるのは、ある性格特性に関して選ばれた匿名の集団を使って、物語空間を共同で構築させ、様々な場面での役割を演じさせ、どのような適応を示すかを見てゆくやり方を、これまでに提唱してきた(安念, 2005; 2006)。これを一度きりの、場面想定法で行うのであれば、それは従来のいくつかのテストバッテリーを組み合わせる質問紙法と変わらないものになってしまうが、ラットの屋外フィールドで研究してきたように数年掛け、紡ぎ出される意識の物語の流れを分析してゆくことで、動物による選択交配系統の代わりを実現できるであろう。

このやり方を、自然環境の多様性に任せて現実の世界の民族比較を行ってゆくの、文化心理学であり、冒頭に述べてきた、日本人の特徴を他の文化と比較することも、単に違いを協調するのではなく、その背景となる生態学的な淘汰圧の観点から比較してゆくことが、ここで述べた話の流れに合致するのである。それは、全ての心理学的な現象を、進化的な制約の歴史と、現時点の生態学的な制約に接地することを意味している。さらに、我々の認識自体がその制約に影響され、言葉を産み出していることに気がつけば、膨大な心理学の流れももっと単純に見ることができ、普遍的な意味で他の学問との連携がとれるかもしれないのである。

引用・参考文献

- 安念保昌 a 1986 情動性に関して選択交配されたラットにおける侵入者攻撃と順位行動. 心理学研究, 57, 273-280.
- 安念保昌 b 1986 『情動性と社会構造』 学位論文(筑波大学).
- 安念保昌 a 1988 情動システムと社会構造 - 情動性に関して選択交配されたラットの社会行動とその生成文法の比較 -. 昭和61・62年度科学研究費補助金研究成果報告書(61790009).
- 安念保昌 b 1988 攻撃行動の遺伝. 遺伝, 42, 27-32.
- 安念保昌 1989 情動性に関して選択交配されたラットにおける社会行動の系列構造と発達の変化. 心理学研究, 59, 326-333.
- 安念保昌 2001 社会的認知の起源. 岡野恒也(編)『社会性の比較発達心理学』アートアンドブレン社, pp. 81-100.
- 安念保昌 2005 リレー小説と性格特性 - 物語構築を介しての対人認知 -. 日本社会心理学会発表論文集, 46.
- アイゼンク, H. J. 1965 異常行動研究会誌 『行動療法と神経症』 誠信書房.
- バーン, リチャード・ホワイトウン, アンドリュー編 2004 「マキャベリの知性と心の理論の進化論」, 藤田和生・山下博志・友永雅巳 監訳, ナカニシヤ出版.
- エルヴィン, ベルツ 1979 『ベルツの日記』 二宮沼龍太郎訳, 岩波書店.
- 藤田・安念保昌・北岡明佳・中津山英子・加藤宏(1991) 餌制限下での野外フィールドにおけるラットの個体数変動と諸行動についての系統比較, 上武大学経営情報学部紀要, Vol. 5, pp. 1-14.
- Fujita, Osamu, Annen, Yasumasa., and Kitaoka, Akiyoshi. 1994 Tsukuba High- and Low-Emotional strains of rats (*Rattus norvegicus*): An overview. *Journal of Behavior Genetics*, 24, 389-415.
- Goldberg, L. 1992 The development of markers for the big-five factor structure. *Psychological Assessment*, 4, 26-42.
- 板倉 昭二, 1999, 自己の起源—比較認知科学からのアプローチ, 金子書房.
- Langacker, Ronald W. 1991 Foundation of Cognitive Grammar, Volume 2: Descriptive Application, Stanford: Stanford University Press.

- Miller, George A. 1956 The magical number seven, plus or minus two: some limits on our capacity for processing information. *Psychological Review*, Vol 63, 81-97.
- 村上宣寛・村上千恵子 1997 主要5因子性格検査の尺度構成. *性格心理学研究*, 6, 29-39.
- 村上宣寛・村上千恵子 1999 『性格は五次元だった -性格心理学入門-』 培風館.
- 大石久和 2011 日本人の自然災害史観 日本人は必ず立ち上がる *Will* (77), 98-105, 2011-05.
- Premack, David; Woodruff, Guy 1978 Does the chimpanzee have a theory of mind? *Behavioral and brain sciences*, Vol. 4, 515-526.
- 下仲順子・中里克治・権藤恭之・高山緑 1998 日本版NEO-PI-Rの作成とその因子的妥当性の検討. *性格心理学研究*, 6, 138-147.
- 辻平治郎・加納真美・新野邊深雪 1990 日本版EPQ (Eysenck Personality Questionnaire) 作成の試み. *甲南女子大学研究紀要*, 26, 59-80.
- 上田篤(編) 1996 『五重塔はなぜ倒れないのか』, 新潮社.
- 上里一郎・山本麻子 1989 アイゼンクの理論. 本明寛(編) 1989 『性格心理学新講座 第1巻 性格の理論』 金子書房, pp. 208-220.
- Morell, Virginia 2010 ニワシドロの求愛, *日経ナショナルジオグラフィック*, Vol. 16, 68-81.
- 和田さゆり 1996 性格特性用語を用いたBIG Five尺度の作成. *心理学研究*, 67, 61-67.
- 山岸俊男 1998 信頼の構造: ころと社会の進化ゲーム, 東京大学出版会.
- 山岸俊男, メアリー・C. プリントン 2010 リスクに背を向ける日本人, 講談社.